

---

# 如何にして花は咲く

くる ひなた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

如何にして花は咲く

### 【Nコード】

N3930U

### 【作者名】

くる ひなた

### 【あらすじ】

アルフレッドは、豊富な資源に潤う大国パトラッシュの皇太子。翌年に成人を控えた悩み多き思春期の彼は、父である皇帝と共に隣国を訪れる。

## 如何にして花は咲く（前編）

アルフレッド・ロ・パトラーシユは、豊富な資源に潤う大国パトラーシユの皇太子である。

本来なら母方の血名を名乗るはずが、父である皇帝フランディース・ロ・パトラーシユの血名が使用されているのは、アルフレッドの母親が正式に世間に公表されていないからだ。

現在、彼は成人を翌年に控えた十五歳。

身分を隠され離宮で生まれ育ち、九年前、六歳の時に正式に皇太子として王宮に迎え入れられた。

だからといって、それまで父フランディースが彼を放っておいたわけではない。

十日に一度はいっぱいの土産物を持って離宮に顔を出し、アルフレッドをたいそう可愛がってくれたので、幼い彼は父親の愛情を疑うことはなかったし、六歳になるまで世間に公表されなかった理由はいまだ知れないまでも、皇太子として過ごす中で大人の事情の複雑さを少なからず学んだ彼は、父にも父なりに何か考えがあったのだろうと思っている。

淀み無き手腕とカリスマ性で大国を御する皇帝として、アルフレッドはフランディースをとて尊敬しているし、惜しみなく愛情をくれる父親としてとても慕っているが、ただ一つだけ、どうしても好きになれない部分がある。

いや、納得出来ない性癖があると表現したほうがいいだろうか。

アルフレッドには、五十三人の母がいる。

“母”といっても、もちろん生んでくれた母ではなく、義理の母。つまりは、父フランディースの妻達である。

彼女達を、アルフレッドが母と呼ぶのは正しくないのかもしれないが、本人達が「母と呼んでちょうだい」と請うのだから仕方がない。

現在、パトラージュ皇帝に正妃はいないが、側妃が五十三人も後宮で養われている。

それなのに、皇帝の子供はアルフレッドただ一人であり、しかも彼はどの側妃が生んだ王子でもないのだ。

フランディースは五十三人の妻達を心より愛していると公言しているし、その寵も綿密なほど平等にそれぞれに注がれるが、彼女達との間に子を生そうとはしなかった。

「子を産む産まないで差がつくのは頂けない。皆一律平等の立場で幸せにしたい」とは恋多き皇帝の言だが、それならば彼がただ一人子を生ずことを求めた相手の女性は、一体何者なのであるうか。

この事実について、知らされているのは皇帝の特別な忠臣ばかりであり、彼らは主人の許しがない限り一生口を割ることはないだろうし、フランディースがそれを話題にすることを嫌ったので、パトラージュにおいてアルフレッドの母親を探る行為は禁忌となっている。

もちろん、アルフレッドが皇太子として王宮に移された当初は、その出自と王家の血を疑う者も少なくはなかったが、彼の目を見ては次々と口を噤んでいった。

アルフレッドの瞳の色は美しい琥珀色。真っ直ぐな髪も父親譲りの亜麻色だ。

顔の造形は父フランディースの幼少時代にそっくりであったし、何より瞳の琥珀色はこの大陸においてパトラージュの王家にしか出ない特別な色彩。

最悪、父親がフランディースでなかったとしても、アルフレッドが王族の血を濃く受継いでいるのは明白であり、皇帝がこのまま側妃達との間に世継ぎを生さないなら、王族から誰かを皇太子に据えねばならないと頭を悩ませていた周囲は、忽ちのうちに歓迎に転じた。

一番荒れるだろうと思われたのは後宮の側妃達だったが、彼女達は何故か驚くほど冷静に受け入れた。

この五十三人の中の誰かが生んだのではない、というのが幸いだっただのかもしれない。

それほど顔を合わす機会があるわけではないが、側妃達はアルフレッドを皆好意的に受け入れ、会えば必ず「ははうえ」と呼ぶようねだった。

来年成人を迎えるアルフレッドだが、皇帝の座を譲り受けるのはまだまだ先の話である。

父から学ぶこともまだまだたくさんあるだろうし、近隣の国々にも足を伸ばして外交の勉強もしたい。

以前よりそう考えていたアルフレッドは、この度隣国グラディアトリアを訪れる機会を得た。

かの国の皇帝、ルドヴィーク・フィア・グラディアトリアと、公爵令嬢ソフィリア・ビス・ロートリアスの成婚の儀に、父と一緒に出席するためだ。

グラディアトリアはフランデースが幼少の頃留学していた国で、国境を接したパトラージュとは長年友好的な関係を築いてきた同盟国である。

父はかの国の王族の方々と特別懇意にっていて、お忍びで遊びに行くことも多々あったが、アルフレッドが訪れるのは初めてのことだ。

式の前日グラディアトリアの城に到着した彼は、我が物顔で王宮を闊歩する父と一緒に若き皇帝陛下との対面に臨んだが、彼は金髪碧眼が美しい優しげで実直な印象であった。

この夜は、グラディアトリア側からの晚餐の誘いは遠慮して、アルフレッドは王城の図書館にお邪魔した。

この国の蔵書の多さは有名な話で、まだまだいろいろ勉強したいと思っている彼の知識欲を刺激した。

上品な司書に数冊貸し出しの手続きをしてもらって、それらを持って馴染みの従者と共に与えられた客室に戻ると、既に用意されて

いた夕飯をいただき入浴を済ませ、ベッドに横になって本に目を通していた。

父フリードリヒは今夜の晩餐に出席し、その後この国の王族に縁深い男性ばかりが集まった、「グラディアトリア皇帝独身最後の夜に乾杯」と称した飲み会に飛び入り参加しているらしい。

今宵は父に就寝の挨拶をするのは無理そうだと、従者を下からせて適当な時間に眠りに就くつもりだったアルフレッドだが、初めての外国訪問に些か興奮しているのだろうか、どうにもなかなか寝付けない。

気分転換にと、夜風に当たりにテラスに出た彼の視界の下に広がるのは、この城自慢の見事な庭園である。

パトラーシュから見てグラディアトリアを挟んだ更に向こうの、農業大国コンラート出身の高名な植物学者ロバート・ウルセルが手掛けたという庭園は、現皇帝ルドヴィークの兄にして、稀代の皇帝と言われた先帝ヴィオラントにも深く愛され、ロバート亡き後もきちんと管理が行き届いている。

辺りは夜闇に包まれ、昼間咲き誇っていた花々も花びらを閉じてしまっているが、かぐわしい残り香がまだアルフレッドを楽しませてくれた。

しばしその香りに癒され、さあいい加減そろそろベッドに戻るかと踵を返しかけた時、彼の視界の先を何か白いものがふわりと横切った。

「……？」

目を凝らして見てみるが、暗いし遠いしでよく見えない。何か、小柄な人影のようであったが、それはすぐさま庭園に茂る木々の葉で見えなくなった。

何だろう。誰だろう。

特別な思いがあったわけでもないが、眠気はまだ訪れてはくれなさそうだし、父が戻って来るのにも時間がかかるだろう。

アルフレッドは夜着の上からガウンを羽織り、客室を出た。

一応警護として立っていたグラディアトリアの騎士に何処へ行くのかとは尋ねられたが、寝付けないので庭を散歩して来ると正直に言つと、「では、お気を付けて。あまり遅くならないよう、お戻り下さいませ」と微笑んで見送られた。

グラディアトリアは先の皇帝の大改革により多くの血が流れたらしいが、そのおかげで悪いものが全部出し尽くされて排除され、今は王宮内はとても安全な場所となっている。

比較的平和とはいえ、たった一人の皇太子に過保護になっているパトラッシュでは、いつ何時も誰かしら従者がくっついていたアルフレッドとしては、王族や賓客といえど他人の干渉が激しくないグラディアトリアの王宮を些か羨ましく感じた。

途中すれ違った騎士に教えられた、庭に出る最短の扉を開けて足を踏み出したアルフレッドは、まずは己の与えられた客室のテラスの下を目指して歩いた。

さつき見かけた白い影はもうそこにはいないかもしれないが、思い掛けず近くで見ることになった夜の庭園は、昼間のそれとはまた違った趣があつて素晴らしく、おそらく夜の散策用に取り付けられているだろう灯りを頼りに、彼は延びゆく石畳の細道に足を進めた。ちょうど目的のテラスの下辺りで、他のものが萎んで頭を垂れてしまっている中で、大きく花卉を開いて佇む白い花を見付けた。

アルフレッドは植物に詳しくないが、確か夕刻から花を開き始める種であつただろう。

白く柔らかそうなそれは、先ほど彼の視界を横切つた影のようであり、また咲く花を見ると彼は決まって父王を一心に慕う義母達のことを思う。

正妃になることも、子を産むことも　フランデース・ロ・パトラッシュの特別なただ一人になることも叶わず、けれど愛憎や嫉妬に狂うこともなく、ただひたすら男の愛を信じて微笑む美しい五十三の花達。

きつともつと幸せになる方法があると思うのに、彼女達が後宮の住人で満足しているのが若いアルフレッドには齒痒く、心の多い父皇帝を不誠実だと罵りたくなることも少なくはない。

けれど、義母達は皆揃って、幸せだと言うのだ。

自分はフランデースを愛しているし、彼も自分を愛してくれている。

側妃が互いに嫉妬し合う必要のない程、公平に寵愛は与えられているし、それに応えるために自分を磨く時間はとても楽しいのだとアルフレッドには理解出来ないし、離宮で彼の世話をしてくれた夫婦の子供で、幼馴染みに当たる少女に意見を求めてもやっぱり「自分の他に奥さんや恋人がいるなんて、絶対に嫌です！」と返ってきた。

望まれるままに側妃達のことを「ははうえ」と呼ぶが、その度何か申し訳ないような、せつない気分になるのだ。

上階の一角に、明々と灯りがともっている部屋がある。

前夜祭に盛り上がるグラディアトリアの皇帝の私室であろうか。

そこに参加している父が、また見目麗しい侍女に一目惚れして口説くような事態にならないよう願いつつ、ふっと溜め息をついたアルフレッドは白い花から視線を引き剥がし、やはりもう部屋に戻って眠ろうと踵を返したその前に、白い人影が立っていて彼をひどく驚かせた。

「わあっ……！」

「どうしたの、少年。迷子？」

突然現れたのは、アルフレッドよりも頭一つ分は小さいだろう人影。

夜の庭園にともされた灯りに浮かび上がった白いドレスに、彼は自分がここに下りてきた理由を思い出した。

驚く程近い距離からこちらを見上げる瞳は、紫だろうか。そして、ふわふわと柔らかかそうに波打つ髪は、闇に溶ける艶やかな漆黒。



どちらも、身体に生まれ持つには稀少な色で、もちろんアルフレッドはそんな人間を初めて見た。

思わずまじまじと眺めてしまった相手は、またそれはそれは可憐な容姿をしていた。

父の側妃の何人かが愛でているのを見たことがある、黒髪の人形クリステイーナによく似た不思議な魅力に、初心な少年の胸はドキリと高鳴った。

「あの……貴女は……？」

「ん？ 私も、迷っちゃったんだよね。いつも手をひかれて歩いていちや、駄目ね」

少女のように見えるが、どこか達観した雰囲気もあって、彼女の年齢を判断するのはアルフレッドには難しかった。

戸惑う彼を気にもかけず、黒髪の娘はひょいと首を傾けて相手の背後を覗き見ると、「ああ」と合点がいったように頷いた。

「夜顔だね。男の子だけど、花好きなの？」

「特別、そういったわけでは……」

夜顔というのは、ナス目ヒルガオ科の植物で、ロート形の白い花が夕方から咲き始めて翌朝には萎む。よく、かんぴょうの原料となるウリ科の夕顔と混同されるが、別物である。

「綺麗に咲いてる。気まぐれでも見てあげたら、花も喜ぶよ」

その夜顔の妖精でもあるかのごとく、同じような色合いと形のドレスで微笑む娘に、アルフレッドの中でずっともやもやとしていたものが口について出た。

「……こんな夜闇の中咲いても、一体誰が愛でてくれるというのですか」

「うん？」

「花は、陽の光の元に咲き誇ってこそ美しく、価値があるのではないのですか？」

それとも、密かに咲くこの花を殊更愛する者がいるとでもいうのだろうか。

華やかで色とりどりに輝く昼間の花々を愛でつつ、儚く慎まじやかな夜の白い花に真実の愛を囁く者がいるのだろうか。

アルフレッドは白い花に向き直り、健気に咲く姿をじっと眺めた。そんな彼の背中に、黒髪の娘がくすりと柔らかく笑う気配がした。「花はね、誰かに愛でられなくて咲くんじゃないんだよ。自分自身の為に、美しく花びらを広げるの」

「え？」

「だからね、それが昼間であつても夜であつても、華やかな場所であつても寂れた場所であつても、全然関係ないの。そこに在ることに意味があるのに、勝手に哀れむのはただの根拠のない上から目線花に失礼だよ」

「……」

花を見て思い浮かべるのは、父の後宮でその寵愛を糧に生きる、美しい側妃達。

けれど、夜顔という闇に咲く白い花を見て思いを馳せたのは、明るい陽光を自ら避け、そつと慎まじやかに生きるひと。

アルフレッドという大国の皇太子を産み落としながら、皇帝の妻の座に上ることを拒んだ、実の母親の姿だった。

アルフレッドも、本当の母親が誰であるのか知っている。

彼女は今も健在で、王宮では皇帝とも皇太子とも身近に過ごしながら、ただ一人の世継ぎを生んだことを周囲に匂わせることもない。後宮の側妃達を不遇だと勝手に哀れむと共に、生母もまた幸せなはずがないと思っていたアルフレッドは、もしかしたら母達にとても失礼だったのかもしれないと、この黒髪の娘の言葉に胸を衝かれた。

「この庭の花はね、みんな特別計算し尽くされて植えられたんだって。植えた人はここにこの時間、この夜顔が花開くことを望んだんだよ」

「……その方なら、名前だけなら知っています。ロバート・ウルセル、コンラートの植物学者ですよね」

「うん、でもこの辺りの木や花は、ロバートさんの弟子が植えたんだって。その人は掛け持ちでとてもしんどい仕事をしていたから、夜寝る前にこっそり一人で夜顔の花を見て、ちよっとは癒されてたみたいよ?」

「……そうなのですか」

この慎ましやかな花を、誰かが望み愛でたのだという。

そしてこの花のような生母もまた、望み望まれ花開き、今も幸せなのだろうか。

その望んだ相手が、フランデース・ロ・パトラージュだったのだろうか。

いずれ、アルフレッドも成人すれば妻を頂き、世継ぎを考えるようになるだろう。

彼にとって、父の恋愛事情は反面教師にかなり得ないと思っていたが、それは幼く誤った認識だったのかもしれないと、この時少し思い直した。

## 如何にして花は咲く（後編）

「お部屋はどのあたりですか？ 私も今日この城にお邪魔したばかりで、ご案内できる自信がないのですが……」

「うん、気にしないで」

父達が酒盛りをしているであろう部屋の灯りが、僅かにおとされた。

もう、グラディアトリア皇帝の結婚を祝う前夜際はお開きになったのかもしれない。

夜も更けたこんな時間に、見知らぬ相手とはいえ淑女をいつまでも迷わせているわけにもいかず、アルフレッドは夜顔から視線を外して、黒髪の娘をどうすれば部屋に送り届けられるか考えた。

「騎士の方が近くにいらつしやるので、道を聞きましようか？」

「いいの。道に迷ったら迷った場所で待つのが、遭難者の鉄則だよ。大丈夫、絶対迎えにきてくれるから」

「え……誰が？」

「うん、でも一人でこんな時間に部屋を出たのバレたら、絶対怒られるから……窓から困っている君を見て思わず助けにきて、一緒に道が分からなくなっただっていう二次遭難的設定で、よろしく」

「え、え、え？」

「大丈夫、君に演技力は必要ない。黙って頷くだけでいいんだよ」

「あの……」

見るからに上質なドレスから、城に仕える侍女や下働きとは思えず、明らかに貴族、しかもかなり高い地位にある家の娘と分かるが、彼女はご令嬢に相応しくない腹黒い笑みをニヤリと浮かべた。

そのとびきり可愛らしい不敵な顔を目の当たりにしたアルフレッドは、激しく高鳴り早鐘のように打ち始めた自身の鼓動に戸惑った。何だろう、こんな気持ちは初めてだ　と、胸を押さえる彼を見

上げていた紫の視線が、しかし次の瞬間すいと動いて脇にそれたかと思うと、ぎゅっと周囲の光を集めたかのように輝きを増し、艶やかな薄紅色の唇が華やかな笑みの形に変化した。

「グイー」

「スミレ、探したぞ」

同時に、アルフレッドの背後から降ってきたのは低く深い美声。弾かれたように振り返った彼の目に映ったのはまた、息を呑むほどの存在感を纏った人物だった。

夜の闇に浮かび上がる白銀の髪に、切れ長の瞼の奥には紫の輝き。絶対的な美貌と見上げるほどの長身の男に畏怖を感じ、思わず顔を強張らせて身体を反らしたアルフレッドの脇をすり抜け、彼は長い腕を伸ばして黒髪の娘をさも大事そうに抱き上げた。

「そなたがいなくなつたと、上では大騒ぎだ。マーサを発狂させる気か」

恐ろしい程の美貌は無表情でありながら、すつと流れてアルフレッドに向けられた視線は心の奥を見透かすようで、冷徹なそれは少年を震え上がらせた。

この男のことを、アルフレッドは知っていた。

対面するのはこれが初めてだが、パトラーシユ王族の琥珀の瞳よりも更に稀少な紫の瞳と、これまた珍しい白銀の髪を持つ大陸一の美貌と名高い、グラディアトリアの先帝にして現在は大公爵の位を持つ、ヴィオラント・オル・レイスウェイク大公爵下に間違いないだろう。

その美し過ぎる造形はあまりに有名であり、また伝え聞く彼の皇帝時代の偉業は、隣国の皇太子であるアルフレッドにとっても憧れを抱くものだった。

レイスウェイク大公爵は、父フランデースとは幼馴染みの間柄で非常に気安い仲らしく、今宵も一緒に酒の席に着いたのではないだろうか。何と言っても、前夜祭の主役である現グラディアトリア皇帝は、彼の末弟である。

「そなた、パトラージュの皇太子だな。妻が世話になった」

妻というセリフに、アルフレッドの胸が一瞬ズキリと痛んだ。

その呼び名と、男が抱き上げた娘の黒髪に愛おしげに唇を寄せる様子から、彼女がかの有名なレイスウエイク大公爵夫人であったと知る。

珍しい黒髪と紫の瞳を見ればぴんと来そうなものだが、その容姿があまりに少女のようにあどけなく、まさか稀代の先帝の愛妻がこんなに愛らしい方だとは思ってもみなかったのだ。

父フランデースは彼女のことをよく話題にはしたが、「面白い娘だ」と言つてにやにやするばかりで、その容姿に触れたことはなかった。

彼女が大公爵夫人、スミレ・ルト・レイスウエイクであるならば、おそらく少女などと言つては失礼な年齢であろう。たしか、現在八歳になる嫡子がいるはずだが、とても一児の母には見えない。

「あ、この子、フランフランの息子さんなの？　つていうか、部屋を出て来た言い訳するタイミングを逃してしまいました」

「言い訳は結構。どんな理由があろうと、そなたがこんな時間に一人で出歩くことを許すつもりはない」

「お昼寝したから目が冴えちゃって眠れないんだもん。シオン君はお子様だからおねむだし、ヴィーは酒盛りだし……」

「だからと言つて、暗闇で足下を取られて転びでもしたらどうする。そなたは今、普通の身体ではないのだぞ」

幼い子供を叱るようなレイスウエイク大公爵の言葉に、「え？」

と夫人のお腹に目をやったアルフレッドは、その柔らかそうな白いドレスが幾らか前に突き出し盛り上がっているのに気付いて、驚きにとび上がった。

「えっ、あの……妊娠されてたんですか？」

「ああ、もうそろそろ産み月だ。このお転婆を足止めをしてくれて、感謝する」

薄明かりの中とはいえ、臨月の大きくなった腹にも気付けなかつ

た自身を恥じて、顔を伏せてしまった亜麻色の髪の少年を宥めるように、白銀の髪の男は穏やかな声でそっと彼に語りかけた。

「フランドーイスは息子の寝顔を拝むと言って部屋に帰ったぞ。そなたも父を心配させないように、早く戻りなさい」

「……はい」

それから、グラディアトリアの先帝はその稀色の瞳を細め、脇に慎ましやかに咲く夜顔の花に視線をやった。

「私の植えた夜顔は、今宵は思い掛けず上客を得たようだな」

「え……？ では、ロバート・ウルセルの弟子というのは……」

「私と、コンラートの王兄ルータスのことだろうな。ここら一体は、皇太子の頃から私が担っていた庭だ」

では、先ほど夫人が話して聞かせてくれた、白花に一時の癒しを求めずにはいられなかった大変な仕事というのは、彼が敢行したこの国の歴史に残る世紀の大粛正のことだったのだろうか。

グラディアトリアの先代の治世が血に塗れていることは、アルフレッドももちろん知っている。

先帝閣下の類稀なる美貌は無表情であるがとても穏やかであり、伝え聞くような恐ろしいことをやってきた人物にはどうしても見えなかったが、そんな少年の戸惑いを見透かすように彼は続けた。

「気が向けば、この城に留まる合間にまた愛でてやってくれ。私には、もう必要のないものなのだな」

「え？」

「今は、もの言わぬ花に癒しを求めずとも、私の全てを癒してくれる存在がいる」

レイスウェイク大公爵はそう言って、大事そうに腕に抱いた夫人に、それはそれは愛おしげに唇を寄せた。

そして、顔を真っ赤にした隣国の皇太子を一瞥すると、もう一度さっさと部屋に戻るように忠告し、生い茂る木々の向こうに姿を消した。

「??おい、アルフレッド」

愛情溢れるレイスウェイク大公爵夫妻の様子に、首筋まで真っ赤になって火照った熱を冷ますため、しばらくの間一人夜顔の前に佇んでいたアルフレッドだったが、階上から自分の名を呼ぶ声が聞こえて、慌てて上を仰ぎ見た。父フランディースの声だ。

「こんな時間にそんな所で何をしている？　ん、もしかや違い引きか？」

「違います。眠れないので散歩に出ただけです」

「なに、隠すことはない。気に入った女性がいたなら、父がこちらの皇帝に掛け合ってやるう」

「違いますってば……」

けれどその時ちらりと、黒髪と紫の瞳を持つ少女のように愛らしい姿が脳裏にちらついて、「なに、馬鹿なこと考えてるんだ自分！」と頭を振る息子の心を見透かしたように、フランディースは「しかし」と続けた。

「黒髪の娘は無理だぞ。あれだけは、わしにもおとせなかった」

「……！」

「なんだ、凶星か？　あれは稀代の皇帝を狭量な男に成り下からせた、恐ろしい魔性の化身だ。お前のような若造の敵う相手ではないぞ」

あのレイスウェイク大公閣下も、皇帝時代は多くの女性を囲っていたというが、退位と共に彼女ら全員との関係も縁も切り、その後出会った夫人とが初婚なのだそうだ。

もともと、パトラーシュ皇帝フランディースのように気が多い方ではなく、女性を侍らすのも政策の一部だったらしいから、二人を同じように考えることはできないかもしれないが、先ほど見たレイスウェイク大公爵がたった一人の奥方を大事にされている様子に、アルフレッドは何だか少し羨ましいような複雑な気持ちを抱いた。

つい、「父上も、たった一人にしばっては如何ですか？」と皮肉が口をつきかけたが、今までの経験上父から望む答えが返ってくる



とも思えないので、虚しい思いを抱く前にぐつと言葉を飲み込んだ。アルフレッドは、そんな父や父の気の多さを許す側妃のことも相変わらず理解出来ないが、それぞれが納得した生き様であるなら口を出すことも、ましてや哀れむことも必要ないのだと、何となく分かってきたような気がした。

そして、皇太子の生母という皇帝の正妃に相応しい経歴を隠し、皇帝の寵愛を求めない実の母もまた、彼女なりに自分の選んだ道を歩んで幸せなのかもしれないと、初めて思うことができた。

ただアルフレッドは、この先自分が誰かと家庭を築く機会に恵まれた際には、実の父母ではなくかの大公爵夫妻を手本に、ただひとりの相手を大切にしていこうと心に誓った。

翌日、グラディアトリア皇帝ルドヴィーク・フィア・グラディアトリアと、ソフィリア・ビス・ロートリアス公爵令嬢の婚儀は盛大に執り行われた。

アルフレッドは父の隣に並んで座り、赤い絨毯が引かれた通路を挟んだちょうど向こう側に、昨夜出会ったレイスウェイク大公爵夫妻が腰を下ろした。

明るい場所で改めて見ても、レイスウェイク大公爵の美貌は凄まじく、その夫人はやはりアルフレッドよりも十歳も年上には見えなかったが、その下腹が膨らんでいることは分かった。

そして、そんなあどけない風情の妊婦を護るように、大公爵と二人で彼女を挟む形で座ったのは、父親譲りの美しい白銀の髪の少年。母親が気安く手を振る相手を、不思議そうに覗き込んだ彼と目があつたアルフレッドには、その瞳が両親と同じ紫色をしていることが知れた。

仲睦まじい両親に寄り添った彼を見て、アルフレッドはただ素直に羨ましいなと感じ、ついその思いが眩きとして唇から転がり出てしまった。

それを隣で聞き止めたらしい父フランディースは一瞬虚を突かれ

たような顔をし、それから「うつむ」と考え込むように眉間に皺を寄せて腕を組んだかと思うと、大真面目な顔で呟いた。

「では、そろそろもう一度、そなたの母を口説くかの」

三日後、パトラーシュに戻ったアルフレッドには、皇太子としての政務が待っていた。

それを補助するのは、ずっとこの国の宰相の役目であり、この日も帰国の挨拶を淡々と済ませて通常業務に移ろうとしたその人に、その時アルフレッドは初めての呼び名で声を掛けた。

「母上」

幼少時代、隣国グラディアトリアで時の宰相ヒルディベル・フィア・シュタイアー公爵に師事し、現パトラーシュ皇帝フランディースの即位以来彼と二人三脚で国を動かしてきた宰相は、皇太子の言葉に弾かれたように顔をあげ、呆然とした表情で彼を見た。

その人は、フランディースの腹違いの妹であるルティーナ・ド・パトラーシュ。

彼女は、十八の年に皇帝の離宮でアルフレッドを生んだ。

フランディースの父である前皇帝とルティーナの母親は、政略結婚として互いに愛情の欠片もなく夫婦となったに過ぎず、初夜以外二人の間に肉体関係はなかった。

それなのに一年後側室が身籠った、明らかに己の子ではない赤子を前皇帝が認知したのは、その父親が実は彼の弟であったからだ。

唯一同腹だったその弟を深く愛していた前皇帝は不義を許し、しかもその子が生まれ出る前に弟が病で急死したことから、彼の忘れ形見としてルティーナを可愛がった。つまりは、フランディースとルティーナは従兄妹にあたり、その事実パトラーシュにおいて公然の秘密とされている。

血の濃さから言うところ結婚も許される範囲内であり、アルフレッドという子供までいるというのに、二人は結婚はおろか婚約もしてい

ない。

表向きは義理の兄妹にあたる彼らには複雑な事情があったのだから、肉体関係を持ったのは同意の上であり、アルフレッドを生むことも双方が望んだことであるが、宰相ルティーナがフランドーアの妻の座に収まることをずっと拒んでいるのが原因であるらしい。

同じ日、グラディアトリアで息子に告げた通り、パトラーシユ皇帝は改めて宰相にプロポーズしたらしいが、再びすげなく断られて終わったという話は、後にアルフレッドの耳にも届けられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3930u/>

---

如何にして花は咲く

2011年6月26日22時55分発行